

在職 41 年の追想



京都産業大学名誉教授 市川 貢

私は昭和 51（1976）年に京都産業大学経営学部専任講師として奉職し、この 3 月に定年退職した。経営学部創設来 50 年のうち 41 年間に在職したことになる。経営学部は最初の 10 年で新設学部としての形が整い、その後の 30 年はほぼ 10 年単位でホップ・ステップ・ジャンプの急成長を遂げてきた。学部の教育内容も時代の変化を読みながら変革を重ねてきた。ジャンプの時期に経営学科 1 学科からソーシャル・マネジメント学科、会計ファイナンス学科を加えて 3 学科に変わった。その間に科目名の変更や統廃合、新設も頻繁に行なわれた。そうした経緯を経て、現在の学部のホームページにあるような充実した教育プログラムが出来上がっている。「マネジメント能力」を持った人材の育成をめざして、京都産業大学経営学部の提供する教育サービスの中身は魅力満載で、まさに「選んで良かった」大学として成長を続けている。

＊

この 41 年間に振り返って印象に残るのは、やはりゼミ教育であった。学部の市川ゼミからは総計 1,206 人が巣立ったが、この中に親子が 1 組いる。その他姉妹が 2 組、姉弟が 1 組、ゼミ生同士の結婚も 5 組ある。41 年勤めればこそ、であろう。

ゼミ運営において幸運だったのは、私の専門がマーケティングだったということであろう。当時の科目名は漢字ばかりで堅苦しそうなのが多かっただけに、カタカナでの表記は学生諸君に一種の安心感を与えたように思われる。加えて、ゼミの「評判」にも助けられた。「ゲームをやるゼミ」「ゼミ生同士の仲が良い」といった評判が定着すると、ありがたいことにゼミを希望する学生が増え始めた。電卓を使ったゲームからパソコンを使ったゲームまで、実に多種多様なビジネス・ゲームを取り入れた。学生諸君は様々なゲームを繰り返す中で、経営者（意思決定者）として何をなすべきかを考えるようになった。架空のモデルの中ではあったが、置かれた様々な意思決定状況の中で問題は何か、それを解決する最善の戦略は何か、自分で考える力が身についたように思われる。

課外活動では学生諸君の自主性を重視し、彼らが提案したイベントはすべて受け入れた。またゼミ生間の交流を深めようと、新歓は「一泊二日」を原則としており、これがコミュニケーションの形成に役立った。

ゼミの指導に当たって常に言い続けてきたのは、「マーケティングの神髄は思いやりの心」という言葉であった。マーケティングというのはまず消費者のニーズを発見し、それを満たす活動であるが、消費者の立場に立って「思いやりの心」で接することが肝要である。人と人のコミュニケーションが見直されている今日、相手と「思いやりの心」で接することの重要性が改めて問われているように思われる。

＊

私とビジネス・ゲームとの出会いは遠く大学院時代に遡る。学部ゼミの授業のお手伝いでアンパイヤヤーとしてビジネス・ゲーム（物流ゲーム）に参加したことがあった。奉職後まもなく、ゼミの活性化を模索していた私は迷わず、ゲームをゼミの授業に取り入れた。ビジネス・ゲームは「様々な状況の中で、もし自分が経営者ならどう判断（意思決定）するか」を参加者に問いかけるもので、グループワークを中心とする授業形式であった。学生諸君の反応は予想をはるかに超えた。それが即効でゼミの活性化につながったのではないか。

ビジネス・ゲームの魅力は、自分の判断の良し悪しがすぐに数字として結果に出ることであり、判断を間違えると赤字になる。自らの経験をもとに、どれだけ適切に対応できるかが問われる。講義中心の授業が多い中、自ら考え行動する実践型のビジネス・ゲームは、経営学部ではもっと増えてもよいと考えるようになった。こうして、ゼミ以外の授業でもビジネス・ゲームを導入することになる。当時担当していた「販売管理論」「マーケティング論」「経営シミュレーション」（後の「マーケティング・シミュレーション」）はもちろん、「外書セミナー」でも一部でゲーム形式の授業を展開した。これらのゲーム・シミュレーションはある意味、いま流行の「インターンシップ」を授業で体験できる科目と言えるかもしれない。ケーススタディの授業等で、「あなたならどうする？」という問いかけがさらに増えることが期待される。

＊

ゼミで「京の輪プロジェクト」を立ち上げ、御園橋801商店街や上賀茂神社の「まちおこし」に学生諸君を巻き込んだこともゼミの活性化につながった。教育の場を教室から学外へと広げて、社会人と接する機会を増やしたことは学生諸君の人的な成長に役立ったのではないか。

まちおこしの中心になったのは「絵馬みこし」である。みこしは京都工芸繊維大学の某学生の卒業制作で大將軍八神社で保管されていたが、現在は上賀茂神社が所有している。みこしの六つの壁面には、北山杉で作った絵馬が180枚ほど詰め込まれている。北山杉の原木を提供し、6cm×8cm、厚さ5mmの杉板に加工する作業は10数年来、京都市北区在住の鈴岡建夫氏のご厚意に甘えている。毎年、葵祭明けの土曜日に杉坂のお宅まで学生と一緒に邪魔している。鈴岡氏には紙面を借りてお礼を申し上げたい。杉板には近隣の小学校や保育園の子供たちに将来の夢や願い事を描いてもらう。北山杉の絵馬で飾られた絵馬みこしは、上賀茂神社の「水まつり」（7月下旬）で神事のあと境内や周辺地域を巡行する。担ぎ手は市川ゼミから上賀茂神社青年会の皆さんと京都産業大学ボランティアサークルNONTSの皆さんに引き継がれている。地域の活性化や子供たちの成長に、京都産

業大学が少しでもお手伝いできればと願っている。

周知のように、神山は上賀茂神社の祭神、賀茂別雷大神が降臨した山である。京都産業大学の神山キャンパスはその神山の麓にある。三叉路から西の方向に目をやると、美しい姿の神山が静かに佇んでいる。京都産業大学と上賀茂神社との「むすびつき」がいつまでも続くことを願ってやまない。

さいごに、私が 41 年間やってこれたのは出合った学生諸君、ご支援をいただいた諸先生や職員の皆様のお陰である。皆様方のご尽力に心からお礼を申し上げる。